自分が謎の人物となり…

〈本書は体験版です〉

インディスティンクト＋Ｑ

第１４話　自分が謎の人物となり…

庫発りべるき

〈はじめに〉

本書をお読みになる前に付属の利用上の注意をご確認ください。

〈追加注意事項〉　この物語はフィクションです。実際の事件・人物・団体などとは関係ありません。

この作品は二〇一四一月一日に初版が発行された「自分が謎の人物となり…」を「インディスティンクト＋Q」シリーズの作品として改訂したものです。

利用上の注意の内容も改訂前とは異なりますので今一度ご確認ください。

〈本編開始〉

1

二〇一六年。秋まであと少しだが、まだ暑い日は続く。

そこは小さく静かな建物だった。複数の男たちが会話を交わしている。

建物は夜の暗闇で遠くからでは形がはっきりしない状態。

建物の中での会話。

「誰にもつけられていないだろうな」

その質問は小さな声で、しかし、鋭い口調で発せられた。

「大丈夫だ」

聞かれたほうの男が静かに答える。
「これが例のものだ」
ある男がバッグを開ける。中にはいろいろな小物が入っている。
バッグを開けた男の声に答えるかのように別の男が中身を見る。
中身のほとんどは見る者にとってはどうでもいいものばかりだった。
どうでもいいものが混ぜられた状態。会合を開いている者たちにとっては、むしろありがたかった。
「何か」を見つけ、男が口を開く。
「確認させてもらう」
中身の一部を慎重に探るように見る。
「間違いない」
納得したような声を出した。
周りにいた者たちも同様に、納得したような様子だった。

「早く用件を終えてここを離れよう」
そのときだった。
男たちのもとに何かが向かってくるような音が聞こえてきた。
「ん？！」
集団の一人が思わず声を出す。
向かってきた物体から煙らしきものが勢いよく出てきた。
「ゴホッ、ゴホッ」
物体の正体を確認するより前に続けて同じものがいくつも転がってくる。
そして煙を派手に撒き散らしたのである。
「誰だ！」
男の一人が叫んだ。
自分たち以外の何者かのしわざだ！
そこまではわかる。しかし……
「な、無い！」

煙が収まり始めたころには、すでに騒ぎを起こした張本人の姿は無かった。
そして男たちが持参したものが無くなっているのである。
騒ぎが起きた建物から離れたところにその人物がいた。
何かを持っている。
騒ぎからしばらくして、まったく別の建物の一室で別の形での騒ぎが起きていた。
「何があった！？」
組織の上役らしき人物が怒鳴るように問いただした。
「いきなりのことでして…何がなんだか……」
また、さらに別の建物の一室では――
「きちんと説明しろ！！」
「申し訳ありません。注意は払っていたのですが、何しろ突然の出来事だったもので…」
商品の売り手と買い手、それぞれが商品とその代金の両方を奪われてしまったのである。
「奴がいったい何者なのかはわからんが…このままにはしておけん！」
売り手側と買い手側、それぞれの組織が今回の取引ぶち壊しについて厳正な対処をすると意気込んでいた。
しかし、である。
自分たちの取引は世間一般に公にできるものではない。だからこそ、売り手側は「商品」が隠れる形でどうでもいい物を混ぜていた。
厳正に対処するといっても警察に通報してどうにかできるものでもない。
むしろそんなことをすれば襲撃犯より先に自分たちが逮捕されてしまう。
意気込んではみたものの、どうやって犯人を

探し出すか、というところから考えなくてはならなかった。

謎の襲撃事件があってからそこそこの時が経った。

雨の夜、警察車両が何台も走っている。

やがて一つの建物が見えてきた。

そこはアパートだった。

警察が狙いを定めたのはそこの一室。

「みんな、行くぞ」

一目で身分がわかるであろうその集団――警察関係者たちの群れが向かっていく。

このときのために裁判所から捜査令状を取っていた。ある程度捜査状況が固まったことで令状が下りたのである。

これで家宅捜索などを強制的にできるようになった。

但し、である。

「相手が相手だからな。十分注意するように！」

「はい！」

警察官たちは各々の装備を意識した。号令をかけた者自身も装備品の拳銃を確認するように見つめる。

そして建物へと慎重に、しかし確実に近づいていく。

やがて警察署に数人の男が連れてこられた。

そして、取調室――

「あなたが関わっていたであろう商売なんだが…」

捜査員は男が関わったとされる「商売」の情報を聞きだすつもりだった。

次の日――

どこにでもあるような民家で新聞を読む者がいた。

読み手の目線の先にはこんな単語があった。

「密売容疑で逮捕」

読み手は何も言葉を出さなかった。
無言で何かを考えていた。
「早く用件を終えてここを離れよう」
あの取引の集団の中の一人の発言。
そして転がる、白い煙を発する物体。
突然の襲撃にあわてる者たち。
容疑者は現時点では容疑を否認している、という言葉も見えた。
そのころ、騒ぎを起こされ取引をぶち壊された売り手側の組織の拠点地では――
「アイツが捕まったか」
売り手側の組織の上役らしき男がタメ息交じりの声でつぶやいた。逮捕されたのは自分の手下だった。
自分にまで捜査の手が及ぶことはないだろうか、気がかりだ。
法的な意味での訳あり品の取引には組織の末端など地位が低いものに深く関わらせるパターンが多い。
たとえ彼らが逮捕されたとしてもなかなか中心人物までにはたどり着けないケースも相当ある。
この上役の男は末端とは言わないまでもそんなに高い地位にいるわけでもない。
捜査機関がたどり着く可能性がそこそこある微妙な立場、という言葉が当てはまるであろう。

2

新聞に事件が掲載されてから少し日数が経過。

「取引」をぶち壊した者の正体がわからないまま秋になった。

滋賀県米原市。

晴れの天気でこの日の朝を迎えた。

この地にある米原駅には東海道新幹線、そして在来線のホームがある。

在来線ホームの乗り場には一つの集団の姿があった。

風貌からすると三十代半ばから六十代と思われる。

やがて列車がホームに入ってくる。行き先は金沢と表示されている。

この列車は愛知県にある名古屋駅が始発、終点が石川県にある金沢駅。

米原からは方向転換して次の駅に向かう。それまで最後尾だった車両が先頭車両となり、次の停車駅へと向かう。

その準備もあり、停車時間が他の駅に比べて長い。

米原駅で待っていた集団が列車に乗り込んだ。

その集団を見つめる一人の男。集団の誰よりも若いと思われる。リュックを背負い、腰にはウエストバッグを着けている。旅行にでも出かけるような様子だった。

別の車両の入り口から列車に乗り込む。

そして乗客たちは待った。八時五十七分の出発時刻を。

やがて列車は集団と若い男が別々の車両に入った状態で動きだした。

しばらくしてアナウンスが流れる。次の停車駅が敦賀であることを案内する。その駅は福井

県にある。
「次は敦賀に停車します。九時二十五分到着の予定です」
その後の停車駅、車両の設備なども案内している。
しかし、男にとっては内容はどうでもよかった。
男は車内を歩き始めた。手にはデジタルカメラを持っている。
（確かこの辺のはずだ）
やがて指定席の車内でそれを見つけた。
米原駅のホームで列車を待っていた集団を――
男は集団の前を通った。集団にはただの旅行者にしか見えなかった。
ただ、彼らを撮影することはない。
手にしているカメラを見て鉄道車両の撮影かと思う乗客もいた。
（趣味は人それぞれだからな。他の乗客や乗務員の迷惑にならないように気を付けて、な）
男は列車の最後尾まで歩くと、引き返していく。
車内を回っていた車掌がデッキにやってきたそのときだった。
「ちょっとすみません」
自分が呼ばれたと思い、声の方向に振り向く車掌。
すると――
「静かにしろ」
男の小さな声。手にしているものは……
小さな拳銃らしきものだった。
「車掌室に案内しろ」
車掌は動揺している。
「騒いだり、案内を拒否すれば乗客・乗員がどうなるかわからないぞ」
車掌は警戒しながらも、最後尾の乗務員室へと向かった。

そこは乗客には中の様子が見えないようになっている。
先に車掌が中に入り、続いて男が入る。
男がドアを閉める。
男が拳銃を隠すように持っていたため他の乗客は男について、「関係者以外立ち入り禁止のはずの乗務員室になぜか立ち入る人物」としか見ていなかった。
その程度は想定していたかのように男はこう言った。
「私のことを他の乗客に何か聞かれたら、取材のために特別に入室許可を得た者だと答えろ。それ以外のことについては個人情報保護を理由に答えられないと言えばいい」
車掌は無言でうなずいた。
男の口から次の要求が発せられた。
「運転士と話をさせろ」
「どういうつもりだ？」
車掌の動揺が大きくなっている。男はそれに構わず続けた。
「今にわかる。それと、拳銃が本物であることを証明する。運転席に交信しながらよく見ろ」
車掌は何かスイッチを押した。すると声が聞こえてきた。
「はい、運転士です」
「もしもし、こちら車掌です。実は…」
車掌は男を見つめながら事情を説明した。
男はウエストバッグから小さな物体を取り出す。何の変哲も無い小さな箱。それを床に置く。
またズボンのポケットからはハンカチも取り出し、小物の上に乗せる。
そのハンカチに銃口を押し当てる。
そして――
音声が車掌の耳に入る。そこで車掌ははっき

りと目にすることになる。
男が手にしているものは人を殺傷するには十分な威力を持つ、「本物」だということを。
銃声が小さい拳銃だったこととハンカチを押し当てたことで、音はそんなに大きなものではなかった。
とはいえ極端な消音効果があるわけでもなく、さすがに室外の乗客にまったく気づかれないというわけにはいかなかったであろうが、男はこれについても「物を落とした」とごまかすつもりでいた。
無理があるかもしれないが、しばらくの間だけごまかしが効けばいい。男はそう考えていたのだ。
実際、最後尾車両の乗客たちの中には、何か物音がしたといわんばかりの表情をする者が少なくない。
車掌が自分の目の前で起きた出来事について運転士に報告しているところで男が口を開いた。
「交信を代われ」
車掌はおそるおそる男に通話装置を渡した。
「今のところ、要求は時速七十キロから八十キロで走行すること。速度制限などでやむをえないときは最低限度の減速で済ませること。但し、上限ギリギリまで近づけたり乱暴な操作をしてまでやる必要は無い。
速度制限は最高許容値より十二キロ以内を維持すればいい」
「そんなことをすれば列車が遅れてしまうが…」
声からして、運転士も運転士も車掌と同じくらい動揺しているようだった。
「それに、信号が赤だったり何か異常が起きたらどうするんだ？
場合によっては自動的に列車が止まってしまうんだぞ」

男はこう答えた。
「遅れについては理由を付けて安全のための徐行運転と乗客に説明しろ。敦賀駅近くまではそれでごまかせ。後のことは私が考える。
停止については必要最小限度にやるのは構わない。ただ、停車駅でも通過してもらうことになるが、それもこちらで考える。
また駅のホームで列車に近いところには、列車が通過するまでは誰一人近づけるな。
運転指令所に今の話を伝えろ。そして、録音やメモの準備を要求しろ」
要求を伝えた男はすぐに次の準備に取り掛かろうと思っている。
（速度を落とすとはいえ、本来の停車駅の敦賀到着まであまり時間は無いな）
男は次にこう告げた。
「私を運転席に立ち入らせろ」
運転士は動揺した。何しろ拳銃を持っているであろう不審者が侵入しようとしているのだから。
しかし要求を拒否した場合、多くの乗客、そして自分を含めた乗務員すべてが……
「……要求を呑めば、本当に危害を加えないんだな？」
運転士は念を押した。
「ああ」
男は答えた。そしていったん交信を終了した。
「聞いてのとおりだ。今から運転室に案内してもらう。移動中は自然に振舞うんだぞ」
男が念を押すように言った。
やがて車掌室から車掌と男が出てきた。
先ほどの物音もあり、不思議そうな表情をするものもいた。
男はそれに答えるかのように自然を装う形で車掌に言った。
「いやあ、先ほどはすみません。物を落とし

てしまって。お客さんをびっくりさせたかもしれません」
「まあ、気をつけていただければ、それで…」
車掌も調子を合わせた。
車掌室には男が銃で撃った小物の残骸らしきもの、そして、使われたであろう弾丸の弾頭が残った。
先頭車両に入る。そこにいる乗客たちは入ってきた車掌、そして一緒に歩いている男に目を向けた。
男はそれに構うことなく、運転室に近づいていく。
「あとは私が話をつける。あんたは出ていってくれ。ただし、余計なことは言うな」
運転室に入り車掌を退室させると、男は運転士にこう告げた。
「私に教えてほしいことがある。加速と減速はいいとして…」
なんと男は、列車の操作方法と運転に必要な書類の見方を教えるように要求してきたのである。
「それを聞いてどうする気なんだ？」
男は当然と言った表情でこう告げる。
「私が運転するからだよ」
「？
「！」
運転士は戸惑った。鉄道車両の取り扱いは間違いを起こすと、場合によっては多くの人命を危険にさらす。
だからこそ、乗客を乗せて運ぶ仕事には相応の教育を受けた者を当てる。
しかしむやみに抵抗した場合のことを考えると――
「……本当に、乗客たちを危険に晒さないと約束してくれるんだろうな？」

運転士は強く念を押した。男は頷きながら運転指令所に連絡を取る。

「今後は私が運転することになる。そこで先ほど運転士さんから聞いたことと重複する点もあるかもしれないが、改めて聞いてくれ。

私の目的からしてみだりに速度を上げるつもりは無い。

運転速度は時速七十キロから八十キロを維持して走行する。速度制限でそれを下回る場合は必要最小限度にそれを意識する。

また、鉄道車両の運転は設備に見合った速度ならば誰が運転しても事故にはつながらない、ということも念頭に置く。

無理な運転はしない。但し鉄道会社にはできるだけ高速運転が可能な状況を維持してもらう。

また、線路内への人の立ち入りや踏切内の車の立ち往生があったとしても、お構いなしに突っ込む」

指令では男の声が録音されている。また、メモを取る者もいる。

男は次のことも語った。

「運転席を明け渡せと言われて不安だろうから、次のことを約束する。

例外として速度が八十キロを超えた状態が十秒以上続いたとき、または九十キロを超えた場合は直ちに列車を停止させて構わない」

男はさらに続けた。

「今後の予定は本来の終点である石川(いしかわ)県の金沢(かなざわ)駅を通過し、この鉄道会社の路線から別の会社が経営している石川県、富山(とやま)県の線路をたどり、新潟(にいがた)県の市振(いちぶり)より少し手前までとする。

富山県から出るつもりは無い。新潟県内の鉄道については何もしなくてもいい」
そして男はキッパリとこう言った。
「言い換えれば新潟県に入る少し前に到着するまでがタイムリミットということだ」
指令所からは戸惑いの声が聞こえた。
「そ、そこまでは私たちにどうにかできるものではない。各方面に相談を…」
男はすぐに答えた。
「だったら警察に相談しろ。一旦話を終える」
速度は時速七十キロ。この状態で運転士が運転席を離れ、運転席を後にする。
すばやく男が運転席に座る。持ってきたリュックはそばに置いている。
それからすぐのことだった。
もともと通過予定の駅を通り過ぎようとしているとき、運転席から何かが放り投げられるように落とされた。
何かの書類らしき物だった。そこにはただ一言、「警察へ」とだけ、大きな字で書かれている。
男は再び指令を呼び出した。そして指令員がしばらくして周囲にこう言った。
「犯人が書類を駅のホームに投げたらしい」
そのころ先頭車両の乗客が驚きの表情をしていた。出てきた運転士にただならぬ様子が見受けられたからだった。
一方、運転席では――
（もう隠す必要は無い。急ごう）
それからすぐに車内放送を通じて、乗客全員が男の声を聞くことになる。
「乗客の皆さんに要求する。この列車は僕が乗っ取った。しばらくの間はどこにも止まらずに走行する。
非常停止スイッチを操作するなど、列車を止

めるようなことはしないでくれ。でなければ皆さんの命も保障しない。
もし列車の走行が妨害されるようなことがあれば、理由を問わず持っている銃での銃殺、爆弾での爆破をおこなう」
そして男は続けた。
「ビールなど、酒類は一切口にしないでもらう。何かのきっかけで発見した場合も要求が拒否されたものとしてそれなりの覚悟をしてもらう。
フタを閉めれば保存できるものは今すぐしまってもらう。
もったいないことを言って申し訳ないが、缶ビールなど一度開けると保存が利かないものについては、開けてしまっている物は今すぐ廃棄してもらう」
酔っ払って行動に歯止めが利かなくなり鉄道関係者に対する暴力を振るう者は少なくない。
こんなときに「酔った勢い」で何でもされたらたまったものではない。男はそう考えていた。
缶ビールを飲んで一息ついていた中年男性の乗客も一気に青ざめていった。
そして洗面台に残っているものを廃棄した。
中年男性は洗面台でさらに別の男性の車内放送を聞くことになる。車掌が自分の苗字を名乗り、その後に説明が続く。
「お客様にお願いいたします。この列車は拳銃を持った男に乗っ取られました。
どうか、やむをえない状況をご理解の上、列車を止めたり犯人を刺激したりしないようご協力をお願いします。
またやむをえない処置として、一度開封すると保存ができなくなる酒類につきましては回収させていただきますので、ご協力をお願いします。
お客様にいろいろ協力していただかないこと

には、皆様の安全を保障することはできません。
大変申し訳ないのですが…」
酒類の回収についても男は車掌に伝えていた。
再び、男が運転席から車内放送をしている。
「どうか鉄道会社の関係者を責めないでほしい。もし、僕のいうことが聞き入れられなければ何人もの犠牲者が出ていたであろうから――」
やがて列車は、本来停まるはずの敦賀駅を通過していく。
それとほぼ同時に、車内放送で男が次のことを告げた。
「申し遅れたけど、僕は日白（ひじろ）　風春（かぜはる）。十七歳。高校二年。ここでは『インディスティンクト＋（プラスキュー）Q』になるかな」

インディスティンクト＋（プラスキュー）Q――

インディスティンクト（indistinct）、英語で形状などが不明瞭な、といった感じの意味がある。
＋Qについては、クエスチョン（question）から、人々がいろいろ追求してみたくなるほどの興味を寄せ付けてしまう要素も含まれるといったことを表すようだ。
すべてがそうというわけではないが、インディスティンクト＋Qと呼ばれる者の中には、作戦の実行後、失敗した場合のみならず成功したとしても、寂しげな様子で自らの手で人生を終わらせる者が少なくない。
それも人々の興味を引きやすくなっている。ただ、すべてが人生を終わらせる者というわけではない。

工作員という表現が適切かどうかわからない形式で、かつ工作員のようなインパクトを与えるほどの言動を取った者をこう呼ぶようになったと考えられる。
但し本職の工作員が任務に従って行動した場合でも状況しだいではインディスティンクト＋Qと呼ばれることもある。
そういったところでは定義があいまいなところもある。

十七歳の少年が列車を乗っ取り、自らをインディスティンクト＋Qと表現したことはすでに警察の知るところとなっている。
そして、指令所には警察関係者が入っている。
警察官が指令所の責任者に尋ねた。
「犯人が言う、その列車が新潟県の市振駅に到着するのは、何時ごろになりそうですか？」
責任者が答える。
「通常通りの運行であれば、終点の金沢には十時四十八分に到着しますが…
途中の停車駅をすべて通過して、かつ、運転速度を時速七十キロから八十キロで走行するとなりますと……
十二時から十三時くらいになると思われます」
「と、なりますと……現在あと少しで十時ですから、タイムリミットまであと三時間程度ということに……」
指令所には重い空気が流れていた。

〈続きは製品版で〉

〈製品版予告〉

無関係の人々を巻き込んだことは申し訳ないと思いながらも、列車を支配することには成功した風春だった。しかし風春にしてみれば「支配できたのはせいぜい列車一本」だけだと思っている。

富山県富山市のある地域では功績を残したサッカースポーツ少年団があった。

そこの指導者は暴言や暴力ともとれる指導を行っていた。

そしてその地域では、所属児童がそういった指導に耐え、チームが功績を残したことでこんな空気に支配されるようになった。

所属児童は厳しい指導に耐え、成長したのだから立派になった者として過大に扱わなければならない。

「厳しい指導」を受けてない者は「立派になった児童」が本来ならば批判されるべき言動を取ったとしても悪い部分を過小評価しなければならない。

そういった空気に対して「厳しい指導」をおこなったり、指導を受けた集団が功績を残せば何をしてもいいのかと強く思う風春は、自分がおこなった「支配」よりある意味広大な範囲の「支配」に挑もうと、遅くても富山県内で決着を付けるつもりでいる。

また、列車の乗客の中にはスポーツ少年団の関係者の姿が……

著者　庫発りべるき
発行　データコーディネートフォルダー
初版　二〇一四年　一月　一日
第二版　二〇一七年　一月　二十二日
(C) Kohatsu Riberuki　2014